

溶生会東部支部の歴史

(溶生会の思いで 溶生会創生の頃)

谷垣尚 (昭和25年卒)

2013年7月15日記

阪大工学部に溶接工学科が新設されたのは昭和19年で、溶接工学科のあるのは阪大と米国のオハイオ州立大学だけである。

木造の新校舎が大阪電気(株)社長の天津さんから寄贈されたが、大阪空襲によって全焼してしまい、私達4回生が入学した昭和22年には校内は空襲による焼跡が生々しく残っていた。昭和22年4月にはまだ第1回生13名、第2回生16名が残って居り、第3回生21名と私達新生21名が加わって学生数は71名の大世帯となっていた。溶生会の前身”榕樹会”も既に発足して居り、会報”榕樹”は2号まで発刊されていた。

第1回生は昭和22年9月、第2回生は昭和23年3月卒業、第3回生以降は戦前の正規の学制に戻って、以後毎年3月に卒業して行った。

註：榕樹とはインドネシア、マレーシアなど南方の海岸に群生する比較的小さい樹木

榕樹会の先輩達は在校の時から先生方共一緒になってとてもよく面倒を見てくれた。入学歓迎コンパ、送別コンパの外にも度々コンパで集り、秋には校庭で運動会を開催して懇親を深めてくれた。

昭和25年3月、私達4回生は卒業、殆どが関西地区に残り、関東に就職したのは妹島君(日立製作所)、野々山君(東京化工)、私(浦賀どつく)の3名のみであった。先輩方も第1回の阿部さん(三菱横浜)、大石さん(東洋電極)、鈴木さん(東芝)、第2回の松浦さん(東洋電極)の4名だけであったが、早速に歓迎会を開いてくれて、小さいながらも榕樹会東京支部の芽はもう出ている様な感があった。或る時コンパで遅くなって大石さんの御宅に泊めて頂いたこともあった。

私は仕事の事でも先輩方に色々と教えて貰った。4月に入社してすぐ、米国から輸入された自動溶接機ユニオンメルトの組立結線が解らず、阿部さんを訪ねて教えて貰い運転することが出来た。私は造船所の現場に配属されたので、関西へ帰省した時などは必ず川重、三菱神戸、相生などの造船所の先輩を訪ねて教えを乞うた。川重の大庭さんが「溶接は実用の前に試験や実験を必要とすることが多いから研究室が必要だ」と言われたので、浦賀に実験室を作り、その後大いに役立ったのは懐かしい思出である。

関東地方の卒業生も年々急激に増大して榕樹会・溶生会の関東支部も正式な組織とし

て発足し拡大発展していった。初代支部長は阿部さん、第2代支部長は大庭さん、第3代は妹島君へと引き継がれた。妹島君は毎年4月の溶接学会初日に関東支部総会を開催、これを溶生会春の会と言って全国総会とし、同窓生の懇親を図った。春の会は今や100名近い会員が集まり、支部長河井君、中西君へと受け継がれている。

溶接は溶接学会、溶接協会等々多くの研究会や委員会があり、必ず同窓の諸兄が出席して顔を合わせている。溶接の関係者からは「阪大の溶接卒業生の団結は固い」とよく言われるが、これも皆先輩諸兄の長年の努力と御心遣いの賜であろう。

阿部さん、大庭さん、妹島君は今は亡いが、溶生会の拡大発展を見守ってくれていることであろう。謹んでご冥福を祈る次第である。

以上